



J-NEXUS 四季報 (第2刊号)

2026年5月

在ボストン日本国総領事館

目次

1. ご挨拶

- ・MIT Welcomes Japan's Curious Minds

(Duane S. Boning MIT Vice Provost for International Activities Clarence J. LeBel Professor, Electrical Engineering and Computer Science) P1

- ・国立研究開発法人 日本医療研究開発機構 ワシントン D.C. 事務所 (佐藤 政文所長) P3

2. ニューイングランド経済・イノベーション・エコシステム概観

- ・イノベーションがつなぐニューイングランドと日本

(Tim Rowe, Founder and Executive Chair, CIC) P4

- ・日本におけるロボティクス・イノベーションの課題

(Russell Nickerson, Engagement Liaison, MassRobotics) P6

3. 研究開発・イノベーション動向

- ・ミニシンポジウムとマサチューセッツ総合病院日本人会懇親会の開催報告

(マサチューセッツ総合病院 日本人医師会代表 堀田 亮医師) P9

- ・イェール・ベンチャーズ活動報告

(Kathy Lynch, University Executive Director, Corporate Strategy & Engagement, Yale Ventures) P10

- ・東京大学発ディープテック学生コミュニティ「DICE」のボストン研修報告 P11

- ・次世代の起業人材を世界へ：GTIE Boston Bootcamp 2025 実施報告 (GTIE) P12

4. その他・イベント紹介

- ・ニューイングランドの日本人科学技術研究者情報 (PI リスト) P13

- ・今後のイベント紹介 P14

1. ご挨拶

□ MIT Welcomes Japan's Curious Minds (Duane S. Boning MIT Vice Provost for International Activities Clarence J. LeBel Professor, Electrical Engineering and Computer Science)

マサチューセッツ工科大学 (MIT) は、創立当初より、日本からの学生を受け入れ、教育し、協働してきた長い歴史を有しています。

1861年にMITが開学してから10年足らず後、武士の家系に生まれた本間英一郎が、MIT初の外国人留学生となりました。1874年には、本間がMIT初の日本人卒業生となり、その後まもなく、同じく武士の家系出身である團琢磨が1878年に卒業しました。さらに数十年後には、牧野きよ子がMIT初の女子外国人留学生として入学し、日本人学生はMITにおける新たな歴史を築きました。

現在、日本人研究者・学生は、MIT大学院生全体の42%を占める米国外出身学生の一部を構成しています。MITは現在もなお、世界中の優れた知性を引き付ける存在であり続けています。MIT学長のSally Kornbluth氏は、「MITはアメリカの大学であり、それを誇りに思っています——しかし、他国から集まる学生や研究者なしには、私たちは大きく損なわれるでしょう」と述べています。

実際に、MITは世界中の好奇心にあふれた優秀な人材を惹きつけ、育成することで、さらに強い大学となっています。そのため、MITの学部課程入試では「ニードブラインド方式」を採用しており、学生本人や家族の収入に関わらず、あらゆる社会経済的背景を持つ優秀な学生を支援しています。2025-2026年度より、世帯年収20万ドル未満の家庭の学部生は、通常授業料無償でMITに通うことが可能となります。また、MITの工学、理学、その他多くの博士課程では、学生の研究および学業に対する十分な支援が提供されています。日本人学生を学部・大学院の両レベルで積極的に受け入れることは、経済状況に関わらず世界中から優秀な学生を集めるというMITの揺るぎない方針において、引き続き重要な要素となっています。

だからこそ、MITが初めて日本人学生を受け入れてから165年を迎える今日、私は日本の学生の皆さんに対し、この活気ある教育コミュニティへの参加を心より呼びかけています。MITでは、グローバルな交流がキャンパスライフのあらゆる側面に深く組み込まれており、費用を理由に参加を諦めるべきではありません。MITへの進学を目標としているのであれば、MITはその実現を支援します。

修士課程および博士課程への進学を目指す学生の意思決定を支援するため、MIT Office of Graduate Educationでは「GradCatalyst」プログラムを提供しています。この学生主導型ワークショ



ップは、年に数回ライブウェビナー形式で実施されるほか、録画版もオンデマンドで提供されています。参加者は大学院出願プロセスに関する助言や研究機会に関する情報を得られるほか、大学院出願料免除の対象となる場合もあります。

さらに、MITによる国際学生への支援は、入学支援にとどまりません。米国ビザ申請に関するサポートからキャリアアドバイザーとの連携まで、日本人学生は International Students Office、Career Advising and Professional Development Office、MIT Alumni Association などを通じて、幅広い支援を受けることができます。

つまり、MIT は世界中から集まる学生を歓迎しています。そして、日本との長く特別な関係の歴史は、日本人学生を MIT へ迎え入れ、彼らが活躍できるよう支援するという強い姿勢につながっています。MIT は、次期の日本人研究者・学生を迎えることを楽しみにしています。

□ 日本医療研究開発機構（AMED）ワシントン DC 事務所 佐藤所長

日本医療研究開発機構（AMED）は、医療分野の研究開発とその環境整備の中核的な役割を担う機関として、2015年に設立されました。私が勤務するワシントン DC 事務所は、AMED 設立の翌年にオープンし、北米を担当地域として、医療関係研究機関との共同研究の推進・調整、医療分野の研究開発動向・政策情報の収集・分析、人的ネットワークの構築等の活動を行っています。

AMED は、医療研究開発を基礎から実用化まで一貫して推進するとともに、医療 DX や AI 創薬、国際頭脳循環の推進にも取り組んでいます。我が国の国家的な最優先課題とされる創薬力の強化のためには、国内外の様々な機関との連携を強化し、情報の収集や発信、人材の循環、共同研究を推進することは極めて重要です。創薬の世界的な集積地であるニューイングランド地域で、具体的かつ建設的な関係を構築するためには、在ボストン日本国総領事館をハブに展開される「J-NEXUS」のプラットフォームが大変有意義であると考えております。

AMED ワシントン DC 事務所としては、J-NEXUS への全面的な協力を通じて、日米の連携強化に積極的に貢献するとともに、「医療分野の研究成果を一刻も早く実用化し、患者さんやご家族の元にお届けすること」という AMED の理念を実現していきたいと考えております。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



2. ニューイングランド経済・イノベーション・エコシステム概観

□ イノベーションがつなぐニューイングランドと日本 (Tim Rowe, Founder and Executive Chair, Cambridge Innovation Center)

「世界で最もイノベーティブ（革新的）な地域」と称される、マサチューセッツ州ケンブリッジ市ケンダルスクエア。レンガとコンクリートの建物が並ぶこのエリアでは、過去30年にかけて、CIC (Cambridge Innovation Center) を起点として、世界有数のスタートアップコミュニティが育まれてきました。現在では、LabCentral や MassRobotics といった非営利関連組織も含めたエコシステムへと発展し、世界最大級のイノベーションキャンパスを形成しています。ケンブリッジというローカルな環境で培われた「アイデアが生まれ、育ち、広がる場」を、世界各地で再現する—その挑戦の中で、日本はこの10年で最も重要なパートナーの一つとなりました。



CICの日本での取り組みは、ニューイングランドで培われたイノベーションの力を、適切にローカライズすることで、他地域にも根付かせることができるという考えのもと始まりました。2018年には、起業家やイノベーターが毎週集うコミュニティイベント「Venture Café Tokyo」を立ち上げ、日本に新たな交流の場とコミュニティを創設しました。続く2020年にはCIC Tokyoを開設し、現在では350社以上が集う日本最大級のイノベーション拠点へと成長しています。その動きは国内各地へと広がり、2025年に開設したCIC Fukuokaは九州最大級のスタートアップ拠点として存在感を高めています。さらに2026年5月には、大阪・中之島にライフサイエンス拠点「O-Nexus (Osaka Life Science Nexus by Nippon Life and CIC)」の開設を予定しており、スタートアップと学術・医療機関をつなぐ新たな中核拠点として期待されています。

こうした物理的な拠点づくりと並行して、コミュニティ形成の取り組みも着実に拡大しています。Venture Caféは東京での立ち上げを皮切りに、現在では全国7都市にて活動を展開し、毎週数百人の起業家や専門家が集う知見共有・ネットワーキングの場となっています。また、同組織が2026年2月に東京で開催した「Global Gathering」には世界各地から1,200名以上が参加し、日本を代表する国際的イノベーションイベントとして高い評価を得ました。さらに、東京を拠点とするCIC Instituteは、グローバルなネットワークや知見を活用し、スタートアップの成長を多面的に支援する専門チームとして、イベントやプログラムの企画・運営、ならびにコンサルティングを通じて、日本各地におけるスタートアップ支援およびエコシステム強化を推進しています。

このような日本と米国をつなぐ取り組みの広がりの中で、米国側の橋渡し拠点として機能しているのがケンブリッジ市に拠点を置くCIC Japan Deskです。JETROをはじめとする政府関係機関や地方自治体、大学との連携を通じ、日本の企業・組織と米国の専門家、投資家、研究機関を結びつけ、ニューイングランドを中心とした現地市場への参入を支援しています。活動の詳細や連携の可能性については、[こちらのウェブサイト](#)をご参照ください。

CIC はイノベーションを、現代社会が直面する課題を解決するための有効な手段と捉えています。エネルギー、食料安全保障、ヘルスケアなど様々な分野において、人材と知見が集積し、相互に刺激し合う環境は課題解決を促進します。こうした環境を「イノベーションハブ」と位置づけ、日本における CIC の取り組みの拡大は、研究・産業・起業を通じて結ばれるニューイングランドと日本の関係が、新たな価値を創出する基盤となり得るという確信を体現するものです。

□ 日本におけるロボティクス・イノベーションの課題 (Russell Nickerson, Engagement Liaison, MassRobotics)

MassRobotics は、米国最大のロボティクス商業化ハブであり、東海岸において 500 社以上のロボティクス/AI 企業からなるクラスターを牽引しています。約 70,000 平方フィートの共有オフィスおよびプロトタイピングラボには 95 社以上のスタートアップが入居しており、35 社以上の企業スポンサーと連携しています。ボストン・シーポートに拠点を置く非営利組織としての独自のアプローチにより、急成長するロボティクスおよび AI スタートアップがスケールしていくための機会を創出しています。MassRobotics は、スタートアップ、投資家、企業、アカデミア、政府、立法関係者、そしてより広範なロボティクス・コミュニティをつなぐグローバルな接続拠点として機能しています。



MassRobotics は、毎年ボストンで開催される Robotics Summit などのイベントにも関与しています。同サミットでは、アカデミアを対象とした Form and Function Challenge の実施、入居スタートアップの展示、ヘルスケアロボティクスに特化したコホート、AWS および NVIDIA との連携による Physical AI フェロウシップなどを展開しています。これらの活動は、MassRobotics が育成するコミュニティの広がりや厚みを示しています。

ここ数年、MassRobotics は日本のロボティクス分野との連携に取り組んできましたが、日本における真のイノベーション創出に向けた協働は、実現に至るまでに時間を要しています。本稿では、検討を重ねた結果として認識されている課題について共有し、それらを乗り越えるための示唆を提示することを目的としています。また、これらの指摘については、非公開の意見交換を通じて、その重要性が確認されており、非公式に意見を聞いた多くの日本側関係者が同様の認識を示しています。

現場における受付機能 (Administrative Front Line)

多くのイノベーション拠点やオフィス、大学施設では、セキュリティデスクや受付スタッフが配置されていますが、その役割は入館の許可確認や基本的な案内に限定されることが一般的です。そのため、これらの窓口は最初の接点として十分に機能していない場合が多く、たとえ訪問が許可されている場合であっても、対応が事務的で歓迎されている印象に欠けることがあります。本来、受付は組織における重要な接続ポイントであり、適切な範囲内で訪問者が関係者へアクセスできるよう支援する役割を担うべきです。例えば、受付からいきなりトップ層へ紹介することは現実的ではありませんが、適切な担当者へつなぐ導線が整備されていれば、「セレンディピティ (偶発的な出会い)」を活かした機会創出につながります。受付スタッフが人の流れを適切かつ迅速に振り分けることができれば、これまで見逃されてきたビジネス機会を生み出すことが可能となります。

失敗に対する認識 (Reframing Failure)

日本ではスタートアップはリスクの高いものと見なされ、プロジェクトや事業に失敗すると「レッドマークが付く」といった評価を受ける傾向があります。「改善 (Kaizen)」という概念があるにもかかわらず、この認識は依然として根強く存在しています。一方、米国などの文化では、失敗が同僚間で冗談として語られ

ることもあり、市場の方向転換（ピボット）によって事業の継続につながるケースも見られます。失敗を過度に否定的に捉えない姿勢を広げていくことが求められます。

課題の可視化 (Real Problems are Hidden)

企業は規模の大小を問わず、自社の弱みを積極的に開示することに慎重であるのが一般的です。これは自然なことであり、物流や事業ポートフォリオ、能力面などにおける弱点を公にすることは戦略的ではない場合もあります。しかし、「弱さの中にこそ強みがある」という考え方も重要です。自らの弱点を正しく認識することで、それに対する対応や改善が可能になります。スタートアップの世界では、課題設定の誤りにより適切でないソリューションが生まれることも少なくありません。企業が自社の課題を明確に示すことで、スタートアップはよりの確なソリューションを開発することが可能になります。MassRobotics では、特定分野に焦点を当てたフォーラムやパネルを開催し、課題と解決策のマッチングを支援しています。また、大企業内にサンドボックス環境を整備することも有効な手法の一つです。

エンジェル投資 (Angel Funding)

日本ではエンジェル投資家のネットワークが十分に形成されていないように見受けられます。多くの富裕層が有望なアイデアに投資したいと考えている一方で、そのための交流の場や仕組みは限られています。また、エンジェル投資家としてどのように関わるべきかを理解していない個人も少なくありません。

スタートアップの位置付け (Honesty about the Place of Startups)

スタートアップはしばしば日本の将来を担う存在として語られますが、その言説と実際の行動との間には乖離が見られます。スタートアップは十分な支援や資金を得られないまま、早期の段階で活動を停止または解散に至るケースも少なくありません。彼らは十分な機会を与えられていないとも言えます。この背景には文化的要因も多く存在しており、その一つとして、意味のある関係構築の前提として高いレベルの信頼が求められる点が挙げられます。既に地位を確立しているビジネスパーソンにとって、成功するかどうか不確実なスタートアップの提案に自身のキャリアを賭けることは難しい場合があります。提案段階での過度な批判性を和らげる動きが求められますが、これは一人の外国人が提起できる範囲を超えています。それでもなお、日本のイノベーションを支援・成長させたいという意思があるのであれば、その言葉と行動の整合性について改めて考える必要があります。

ユニコーン志向 (Chasing Unicorns)

多くの投資家はユニコーン企業の創出を目指しており、それは当然の夢でもあります。しかし実際には、堅実なビジネスの多くは、やや地味で、成長が緩やかであり、長期的な軌道を描くものです。このようなビジネスは、実社会の課題を公正に解決するという本質を示しており、むしろ注目されるべき存在とも言えます。必ずしも容易で劇的な成功の道ではありません。すべての企業にとってベンチャーキャピタルが適した選択肢であるとは限らず、その場合、どこで成長の機会を見出すべきかが問われます。

産業界の関与 (Industry Participation)

既存産業は、自らの事業にスタートアップを組み込むことで新たな解決策を見出す必要があります。これはスタートアップにとって自然な形での資金確保や成長の機会にもなります。例えば、自動車工場がAI や部品ピッキングを含むスタートアップの製品を必要とする場合、その分野において高度なエンジニアリング能力を有していても、必ずしも専門ではないことがあります。その際、スタートアップとの連携により効率的

な導入が可能となります。重要なのは、相互の努力を損なうことなく、最適な形で連携を進めることです。利害を共有するパートナーシップは、スタートアップの成長を支える有効な手段となります。

アカデミアの役割 (Academic Momentum)

アカデミアは、学生プロジェクトをスタートアップへと移行させるための支援を強化する必要があります。日本では、助成金による研究を継続するのではなくスタートアップの道を選んだ場合、その後は自力で進めざるを得ないと感じるケースもあります。また、スタートアップ支援の責任が地域自治体に委ねられる傾向があり、特に東京圏以外では資金が限られている現状もあります。その結果、学生発のスタートアップは他の機関の支援に依存することが多くなります。さらに、多くの人にとって「サラリーマン」としての安定したキャリアを選ばないこと自体がリスクと捉えられる側面もあります。地域の支援制度は存在していても、その後の成長の勢いが維持されないケースも見られます。

「バッド・ブラッド・エフェクト」 (“Bad Blood” Effect)

スタートアップや組織が日本との連携を模索する中で、関心の欠如や意思決定の遅れに直面した場合、それは単なる機会損失にとどまらず、日本がイノベーションに真剣に取り組んでいないという印象を残す可能性があります。日本国内外のスタートアップの中には、市場開拓を試みたものの成果が得られず、最終的に国外へ移転したり、事業の方向転換を余儀なくされた例も見られます。その結果、日本の意思決定の実効性に対して、国際的に懐疑的な見方が広がる可能性があります。ゲーム業界において、開発者が評価されない、あるいは制約を受けると感じて海外企業へ移った事例からも示唆が得られます。日本には優れたイノベーターが多く存在しますが、硬直的で形式的な制度や慣行によって制約を受けていると感じる声もあります。イノベーターが力を発揮するためには、開かれた支援的な環境が求められます。

停滞を打破するために (Remedies for Stagnant Innovation)

エンジニアやスタートアップ向けに、自由でオープンなネットワークングおよび支援イベントを実施することは、自然なコミュニティ形成に寄与します。「飲み会 (Nomikai)」のような形式は、米国のハッピーアワーに近い側面を持ちつつ、創造的な議論の場として活用することができます。また、需要の高い設備を備えたラボの整備も重要です。スタートアップは試作段階において少量生産や柔軟な対応を必要としますが、従来の工場は量産を前提としているため対応が難しい場合があります。さらに、日本への技術導入を容易かつ魅力的にするためには、市場アクセス、資金、人材ネットワークといった具体的な価値提供が求められます。2週間程度の短期アクセラレータープログラムも有効であり、日本国内外のスタートアップ双方にとって有益な機会となり得ます。常にスタートアップの「スクラッピーさ (限られた資源の中での機動力)」を踏まえ、最小限の負担で最大の効果を生む「低リスク・高インパクト」のアプローチが重要です。

以上の課題を提示することで、日本におけるイノベーションの発展をより効果的に支援するための視点が得られることを期待します。MassRobotics はロボティクス分野を中心に活動していますが、これらの示唆は他の産業分野にも適用可能であると考えられます。グローバルなロボティクス産業の発展にご関心のある方は、ぜひMassRobotics までご連絡ください。

3. 研究開発・イノベーション動向

□ ミニシンポジウムとマサチューセッツ総合病院日本人会懇親会の開催報告 (MGH 日本人医師会代表 堀田 亮医師)

去る令和8年3月27日に80名超の参加者をお迎えしMGH Simches Research Centerにおいて、ミニシンポジウムおよびMGH日本人会懇親会が開催された。シンポジウム冒頭で高橋誠一郎総領事は、MGHはじめボストンの医療・研究機関や製薬企業で働く日本人を激励されるとともに、J-NEXUS事業のご紹介と日米の医科学振興や頭脳循環に是非とも貢献して欲しいとの思いを口にされた。ミニシンポジウムにはリモートを含む5人の方々が登壇し、それぞれの研究成果や米国での生活、また多様なキャリア形成について興味深いお話をされた。

今回は同時期に文科省の高度医療人材育成拠点形成事業の一環でボストンを訪問していた、慈恵医大分子疫学研究部の浦島充佳教授以下20名の研修グループも参加した。Boston Medical Odyssey (BMO)と銘打たれたこの研修旅行は本プログラムの目玉企画となっており、将来高度医療人材となるべく若手医師・研究者や医学生たちを選抜し、1週間延べ40超の研究室、医療機関や現地企業で知のシャワーを浴びてもらい、日本、ひいては世界の医療・医学の発展に寄与する人材を目指す動機付けとしている。こうした主旨にご賛同頂きBMOにご協力下さった先生方のほとんどは、総領事館が作成されたPIリストにも参加されている。遠く離れたボストンの地で日本の異なる省庁の取り組みが交差し、ともに発展していく様を目の当たりにできたのは幸せだった。

さて、2時間の濃密な「ミニ」シンポジウムの後は懇親会で大いに盛り上がったのだが、これまでMGH日本人会ボードメンバー達の手弁当形式で行ってきた懇親会に今回は初めて現地日系企業のご協力とご参加を頂いた。これまでMGHはじめアカデミアと現地日系企業の方々が交流する機会は意外に少なく、双方がボストン特有のイノベーション・エコシステムを十分に活用できていない歯がゆさを感じていたのは筆者だけではなかったようだ。おかげさまで今回の懇親会はMGHだけでなくボストン周辺の様々な医療・研究機関に所属する医師・研究者の方々と日系商社、製薬・テック企業、さらには政府関係者と日本からの医師・研究者・医学生がまさにミングルする、大変活気のある会となった。

今後本会が発展していくにつれ、そのほかの研究者グループや団体との住み分けなどについて様々な意見が出てくることが考えられるが、この狭い街の小さな日本人コミュニティの中で空白地帯ができるよりは、重なり合うところがいくつもでき参加者が選択できるようになるくらいがちょうどいいと考えている。こうした専門や職種、世代を越えた日本人同士の交流がますます活発になり、海をも越えて広がっていくのを期待している。



□ イェール・ベンチャーズ活動報告 (Kathy Lynch, University Executive Director, Corporate Strategy & Engagement, Yale Ventures)

2026年2月26日、イェール・ベンチャーズおよび在ボストン日本国総領事館は、コネチカット州ニューヘイブンにおいて産学連携・イノベーションセミナーを開催した。本イベントには、イェール・ベンチャーズ、在ボストン日本国総領事館、JETRO ニューヨーク、AdvanceCT、BioLabs New Haven の関係者に加え、15以上の日本および日系のライフサイエンス・製薬関連団体の代表者が参加した。本会合は、ライフサイエンスおよびイノベーション・エコシステムにおける優先事項の共有と、具体的な連携機会の特定に向けた体系的な意見交換の場となった。



本セミナーの目的は、イェール・ベンチャーズの全体プラットフォーム、知的財産 (IP) ・ライセンスングサービス、アクセラレータープログラムを含む各種プログラムおよび連携の枠組みを紹介するとともに、産業界の参加者から戦略的重点分野や望ましい連携・協業モデルについて直接意見を得ることであった。これらの議論は、Yale Innovation Summit への参加や、コネチカット州のバイオテック・エコシステムとのより深い関与といった短期的な連携の道筋と結び付けられ、実務的な次のステップに焦点を当てたオープンディスカッションおよびネットワーキングへとつながった。本取り組みは、イェールの特許技術の技術移転、科学研究における共同研究、教員主導のアクセラレーターやイノベーションセンターとの連携、さらにはニューヘイブンおよびコネチカット州全体に広がるスタートアップ・エコシステムとの接続など、新たな連携機会の検討の出発点となるものである。

この流れを受け、イェール・ベンチャーズは、本セミナーの参加者および日本企業の皆様に対し、2026年5月27日および28日にコネチカット州ニューヘイブンで開催されるYale Innovation Summitへの参加を呼びかけている。本サミットは、バイオテック、ヘルス、テクノロジー、クライメートなどの分野において、起業家、投資家、産業界のリーダーなどが一堂に会する、米国北東部最大規模のイノベーションイベントである。また、本サミットはイェール大学の起業家精神を象徴する主要イベントであり、研究と実社会への応用をつなぐ役割を果たしている。イェールおよびそのパートナーがどのように重要なアイデアを通じてグローバルなインパクトを創出しているかを示す場であり、日本企業にとってイェールの研究者やベンチャーとの関係構築に適した機会となる。今年の基調講演者は、Alibaba Group 共同創業者兼会長の Joe Tsai (BA '86、JD '90) である。

本サミットには2,500名以上が参加し、300以上のベンチャーが紹介され、スタートアップ向けに総額60万ドル以上の賞金が授与されるほか、2日間にわたり60の基調講演およびパネルセッションが実施される。6つの分野別プログラムに加え、イェールのイノベーション・エコシステムの広がりや厚みを示す多様なプログラムも予定されている。詳細および参加登録については、以下のウェブサイトをご参照いただきたい。

[https://ventures.yale.edu/yale-innovation-summit-yale-ventures.](https://ventures.yale.edu/yale-innovation-summit-yale-ventures)

□ 東京大学発ディープテック学生コミュニティ「DICE」のボストン研修報告 (DICE)

① 学生コミュニティ「DICE」について

東京大学大学院工学系研究科では、ディープテック領域での起業・社会実装を志す学生向けの講義を実施しており、「DICE (Deeptech Innovation Community for Entrepreneurs)」は、その修了生を中心に2021年に発足した学生コミュニティです。宇宙・バイオ・素材・農学・エネルギー・AI・半導体など幅広い分野の学部生から博士課程学生までが所属しています。起業・各種プログラムへの挑戦・研究・海外進学といった「次の一歩」を互いにサポートし合う場となっています。



毎年3月頃には海外のディープテック・スタートアップエコシステムとの交流を目的とした海外研修を実施しており、今年度のボストン研修は3月1日～7日の日程で、学生8名が参加しました。

② ボストン研修の訪問先と活動内容

研修は、一部運営事務局がサポートしつつも、基本的には学生が各自の研究・事業領域に関連する訪問先を自ら開拓し、個別で研修スケジュールを組み上げる形で実施しています。

学術・研究機関としては、MITおよびハーバード大学の研究室や関連施設を複数訪問し、最前線の研究者との意見交換を行いました。また、MIT ILPのような産学連携機関を通じて、大学発技術の社会実装に向けた取り組みについても学びました。スタートアップ支援の面では、ボストンを代表するアクセラレーターであるMassChallengeや、ロボティクス・先端製造分野に特化したエコシステムハブMassRoboticsなどを訪問し、現地のスタートアップ支援の実態を肌で感じました。さらに、ボストンで活躍する日本企業や日系の起業家・研究者との交流機会も設け、グローバルなビジネス展開の生の声を聞く場を持ちました。

東京大学からMITやハーバード大学に進んだ学生との交流も印象的でした。自らの体験に基づく率直なキャリアアドバイスや、日米の大学・大学院や研究・起業環境の違いについての話は、参加学生に大きな刺激を与えました。

③ 研修の成果と今後に向けて

充実した訪問・交流を経て、学生からは具体的な成果が既に生まれています。

ある学生は、訪問先企業の方々とのディスカッションの中で海外の先行事例を紹介してもらったことをきっかけに、自身の事業の方向性を大きくピボットしました。新たな方針のもとで仮説検証を進め、実際に起業へと歩みを進めています。

また別の学生は、今回の訪問をきっかけに米国の大学院進学を真剣に考え始め、すでに準備活動を開始しました。さらに、訪問先とのディスカッションを通じて事業アイデアをブラッシュアップし、帰国後に各種プログラムへ応募・採択に至った学生もいます。

このように、ボストン研修はDICEの学生にとって、事業の具体化・進路の拓開という両面で有意義な機会となりました。もし来年度も同様の研修を実施する機会があれば、より多くの学生がボストンのエコシステムと深くつながり、大きく羽ばたいていけるよう、ボストンでご活躍の皆様からのご支援・ご協力を賜えますと大変ありがたく存じます。

また、今回の訪問中に、多大なご支援をいただくと共に、本誌で私たちの活動をご紹介させていただく機会をいただいた在ボストン日本国総領事館の皆さんに、心より感謝申し上げます。

□ 次世代の起業人材を世界へ：GTIE Boston Bootcamp 2025 実施報告（GTIE）

大学発スタートアップ創出を目的として、東京圏の大学等が結集したプラットフォーム「GTIE（Greater Tokyo Innovation Ecosystem：ジータイ）」は、2026年3月、大学生の海外派遣研修「GTIE Boston Bootcamp」を実施し、ボストンのCICケンブリッジを拠点に活動しました。GTIEに参画する大学群のうち早稲田大学、東京大学、慶應義塾大学など5大学から、グローバルな視点を持つ起業家を目指す9名の学生が選抜を経て、派遣されました。



本プログラムでは、ボストンで活躍する起業家、MITの教員・学生、アクセラレーターなど多様なエコシステムプレイヤーとの対話を中心に、グローバルな視野のアントレプレナーシップを育む機会が提供されました。講義や視察だけでなく、少人数での議論やネットワーキングを通じて、学生一人ひとりが自身のビジネスアイデアや将来像と真摯に向き合う機会となりました。

学生たちが強く印象づけられたのは、「イノベーションはシステムや組織だけでなく、人と人とのつながりによっても支えられている」ということです。ボストンならではの密度と熱気の中で、立場や所属を越えた人がつながり、失敗を糧に次の挑戦へ進む起業家の行動を後押ししていました。そのような場に直接触れられたことは、日本の大学教育の中では得難い貴重な学びの機会となりました。

参加学生からは、帰国後の学びやキャリア観が大きく変化したとの声が多く寄せられています。このブートキャンプで得られた知識と築かれた人脈が、将来の日米間のイノベーション協力に貢献する人材育成に役立つことを心から期待しています。

最後に、本プログラムを主催した立場として、学生たちが短期間で大きく視野を広げ、主体的に学び取っていくその姿は、大学を拠点とした起業家教育の価値を改めて実感させてくれるものでした。本研修でのボストン訪問にあたり、ご多忙なか表敬のご機会をいただき、学生を鼓舞してくださいました高橋総領事と総領事館関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

4. その他・イベント紹介

□ ニューイングランドの日本人科学技術研究者情報 (PI リスト)

近年、科学技術の重要性は一層高まっており、経済成長はもちろん、国家安全保障に至るまで、国民生活を支える重要な基盤となっています。我が国政府では、科学技術外交を戦略的に推進し、海外で活躍する日本人研究者を重要な人的資産と位置付け、研究者コミュニティとの連携強化や人的ネットワークの構築に取り組んでいます。

ボストンをはじめニューイングランド地域は、ライフサイエンス、バイオテクノロジー、AI、量子、エネルギーなどの分野で世界有数の研究拠点が集積し、多くの日本人研究者が第一線で活躍しています。

在ボストン日本国総領事館では、研究者同士や日本本国との連携を強化することが、日米協力の深化、ひいては日本の国力強化につながると考えており、このたび、ニューイングランドで活躍する日本人 PI (Principal Investigator: 大学等における研究主宰・責任者) 情報をリスト化し、2026年2月に公表しました。ニューイングランド日本人 PI リストは在ボストン日本国総領事館 Web ページに掲載をご覧ください。

本リストは、日本の関係省庁や大学等に共有し、海外に挑戦したい若者や国際共同研究を模索する日本の大学に活用頂くことなどを通じ、我が国の科学技術力の基盤の強化に繋げることを目指しています。

また、登録された PI には、日本との繋がりを強めることによる優秀な人材確保ポテンシャルの向上及びそれに伴う所属機関での日本人プレゼンスの向上が期待されるほか、当館からも日本関連の交流機会の提供などを行っていきたいと思っています。

●登録されている研究者 (PI) への連絡について

各研究者への連絡先は、PI リスト右欄に記載の URL をご確認ください。本 PI リストを經由して掲載されている PI に連絡を取る際は、メール件名に【PI リスト】と明記頂くようお願いいたします。

また、本リストを通じて留学の受入先や国際共同研究などが生まれた場合には、是非こちらまでお知らせください。本取組みの継続と拡大には皆様の賛同の声と本リストを活用した具体事例の蓄積が欠かせません。何卒皆様のご協力をお願いいたします。

●追加登録を希望されるニューイングランド在住の PI の方へ

ニューイングランド地域に在住し、大学・研究機関等で研究主宰者 (PI) として活動されている日本人研究者の方で、本リストへの掲載を希望される場合は、以下宛先までご連絡ください。

在ボストン総領事館 経済・科学技術班メールアドレス

business@bz.mofa.go.jp

□今後のイベント紹介

●当館主催、共催、後援イベント

5月22日（金）：BENEATH THE GREAT WAVE（主催：Japanese Associate of MIT、後援：当館）

5月31日（日）：Innovation Spotlight: Japan at Museum of Science Boston（主催：ボストン科学博物館、協力：当館）

<https://www.mos.org/events/innovation-spotlight-japan>

6月2日（火）：The Japan Advantage: A New Era for Global Drug Development（主催：国立研究開発法人国立がん研究センター、提供：CIC ジャパンデスク、後援：当館）

<https://luma.com/011h0wkc>

●その他イベント

5月20日（水）：The Living Algorithm: How Biological Feedback Loops Will Unblock the AI Drug Discovery Bottleneck（主催：BasisTech）

<https://www.basistech.com/events/onava/>

5月20日（水）：The Blueprint Showcase

<https://luma.com/79osvfya>

5月26日（火）～31日（日）：Boston Tech Week

<https://www.tech-week.com/calendar/boston>

5月27日（水）～28日（木）：Robotics Summit & Expo

<https://www.roboticssummit.com/>

5月27日（水）～28日（木）：Yale Innovation Summit

<https://ventures.yale.edu/yale-innovation-summit-yale-ventures>

5月28日（木）：J-BRIDGE・Yale Innovation Summit 参加スタートアップとの交流イベント（主催：ジェトロ・ニューヨーク事務所、Yale Ventures）

https://www.jetro.go.jp/form5/pub/nya/jb_yale_registration

6月4日（木）：June EnergyBar

<https://greentownlabs.com/event/june-energybar-2026/>

6月8日（月）～9日（火）：Digital Health & AI Innovation Summit

<https://digital-health-ai-summit.worldbigroup.com/>

6月25日(木) : Summer Kickoff Party 2026

<https://luma.com/t2jan1fx>

6月25日(木) ~ 26日(金) : QUANTUM.TECH WORLD

<https://www.alphaevents.com/events-quantumtechus>